

港町 1 遺跡の調査

山谷文人

〒 097-0101 北海道利尻郡利尻富士町鴛泊字富士野 6 利尻富士町教育委員会

The Report of Investigation at the Minatomachi 1 Site, Rishiri Island

Fumito YAMAYA

Rishirifuji town board of education, Oshidomari, Rishiri Is., Hokkaido, 097-0101 Japan

Abstract. The report is investigation at the Minatomachi 1 Site, Oshidomari, Rishiri Island. This site is the village remains the middle of Jomon [Cylindrical Jomon-pottery Culture]. Dump remains of used Jomon-pottery, a stone tool and many stones were discovered to the north of site, so there is much possibility that the pit houses buried underground to the south heights.

はじめに

利尻島には、旧石器時代からアイヌ文化に至る数多くの遺跡が埋蔵されている。なかでも、縄文時代の遺跡は数多く分布し、当時から豊富な海産資源はもとより、自生する堅果類や山菜を利用しながらムラ（集落）を形成し生活していたと想像される。隣の礼文島では、有名な縄文時代後期の船泊遺跡をはじめ、中期の上泊 3 遺跡、晩期の浜中 2 遺跡など多くの遺跡が知られている。

利尻富士町では、過去の分布調査により、中期から晩期の野塚遺跡群、後期の本泊遺跡や晩期の大磯遺跡などが周知されている。平成 6 年と 21 年に発掘調査が行われた利尻富士町役場遺跡からは、早期や中期から晩期に至る断片的な資料が得られている。しかし、このような開発に伴う大きな発掘調査が少なく資料に限られるため、町内の実態はつかみきれしていない。

今回報告するのは、平成 15 年に町教委で実施した港町 1 遺跡の発掘調査である。小規模な調査であるが、比較的まとまった土器が出土しており、本報告によって利尻島における縄文時代中期の実態が多少なりとも浮き彫りになれば幸いである。

遺跡の概要と調査に至る経緯

港町 1 遺跡は、利尻富士町鴛泊字港町に位置する（図 1）。見晴らしの良い標高 30m 以上の段丘上に立地し、東側には鴛泊港を望み、西側は鴛泊小学校や市街が広がる。本遺跡の南東には、小さな沢を挟んで、港町 2 遺跡が隣接している。本遺跡は、周知の埋蔵文化財包蔵地として登録（H-10-6）され、古くから縄文時代後期の遺跡とされてきた。また、この辺りは宅地造成されず畑地が連綿と広がっていたこともあり、遺物がよく採集される場所として知られていた。

発掘調査の目的は、遺跡の年代や性格を把握するための範囲内容確認調査である。調査地点は、港町 140・141 番地で、期間は平成 15 年 9 月 1 日から 22 日まで行った。面積は 25 m²である。作業は教育委員会職員で行い、期間中、鴛泊中学校の体験学習や鴛泊小学校の見学を受け入れている。

また、鴛泊小学校に保管されていた同遺跡の採集遺物の寄贈も受けており、今回の報告に掲載することができた。

遺物の注記記号は、発掘調査に伴うものを「M1A」、鴛泊小学校保管のものを「M1O小」とした。

調査方法と層序

調査方法は、図2のとおりトレンチを道路に直交するように1本、平行するように2本設定し、表土より手掘りで掘削した。各トレンチは、前者を1トレンチ（長さ13m）、後者を2トレンチ、3トレンチ（長さ6m）とし、F字状になるように設定した。

土層断面図は、1トレンチ南壁と2トレンチ西壁、3トレンチ西壁（北半部）について、作成した（図3）。地形は南から北側へ傾斜しており、3トレンチにおいては50cm程度の傾斜が認められる。表土は、畑の耕作土であり厚いところでは50cm堆積していた。遺物包含層（3～5層）は、粘性のある暗褐色土を主とし、層厚が10～30cm程度と薄いことから、後世の耕作による影響も考慮される。

出土遺物の集中地点については、微細図を作成し、番号を付してレベルを計測し取り上げた。

遺物出土状況（図4）

遺物は、4層直上から出土している。なかでも地形が落ち込む1トレンチ側で、幅9m程度の範囲に縄文時代中期の土器や石器、礫が密集して発見された。その一部には炭化物の分布も認められる。出土レベルは標高36m前後であり、ほぼフラットな出土状況が確認された。このような出土状況から何らかの遺構の存在が考えられたが、個体復原可能な土器の集中および南から北へ傾斜する落ち込みにおける出土状況、さらに調査地点がより標高の低い遺跡の北端部に位置することからみて、「廃棄場跡」とであると判断した。

出土遺物（図5～12, 14）

出土土器の主体は、縄文中期の深鉢形土器で、ほとんどの個体の器面に結節羽状縄文が施文されており、礼文島上泊3遺跡出土土器の分類というI群C類に相当するものであろう。

1は、底部を欠くが、口縁部に押引文が施文されている。2より一回り小さいが、両者は類似している。3は、ほぼ完形で1トレンチ東側よりまとまって出土した。胴上半は丸みを帯び、下半にかけて大

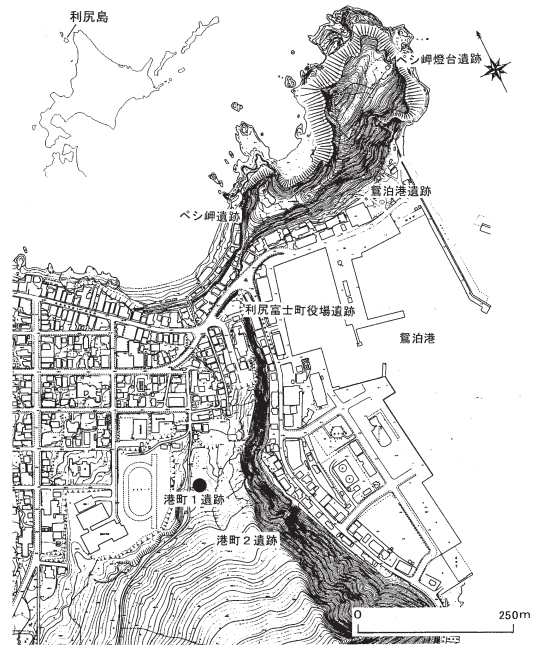


図1. 遺跡位置図.

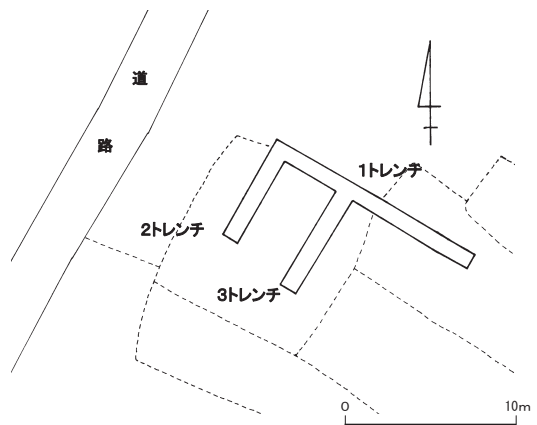
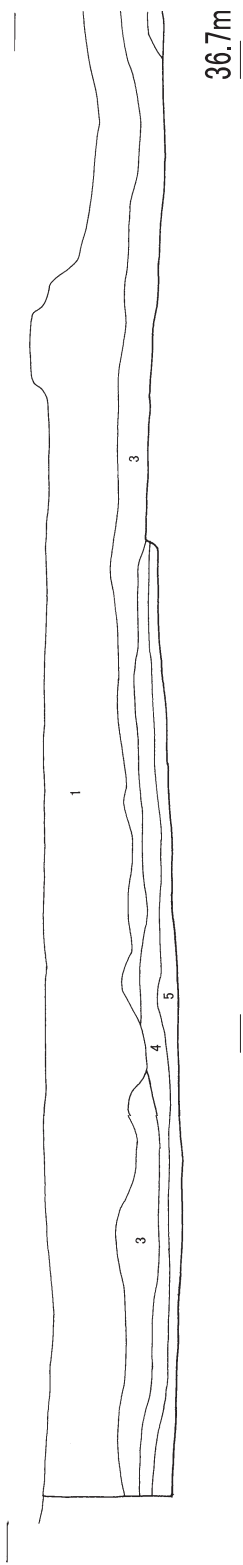


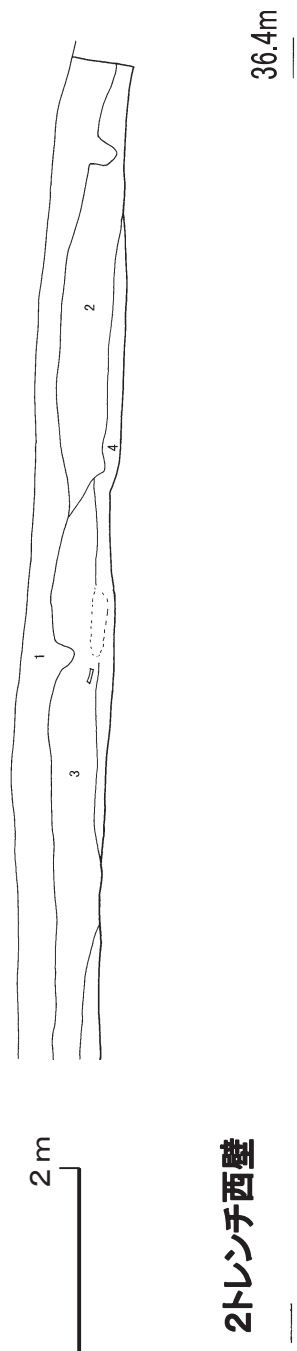
図2. トレンチ配置図.

きくすばまる。器高43.3cmを測り、出土土器中最大のものである。4は、3の北側からまとまって出土。器高26.8cmを測る。3・4ともに口縁部内面に縄文が施文されている。5は、胴部が直線的に立ち上がる器形で、器高27.8cmを測る。口縁部文様は縄文である。8～12は、口縁部が平縁で肥厚帯をもつ。8は、押引文が口縁部直下に3列施文され、縦2列の押引文により区切られている。9は、外に張り出す底部から口縁部にかけて直線的に開く器形。

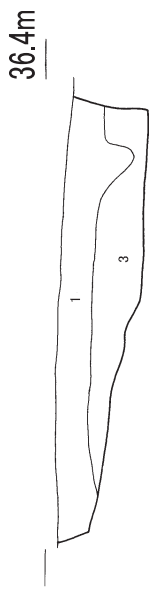
1トレンチ南壁



2トレンチ西壁



3トレンチ西壁



土層説明

- | | |
|---------|---------------|
| 1. 耕作土 | 小石含む、遺物なし |
| 2. 暗褐色土 | 縄文期の遺物包含層 |
| 3. 暗褐色土 | 直上より遺物出土 |
| 4. 褐色土 | 小石・炭化物含む、遺物なし |
| 5. 明褐色土 | |

図3. 各トレンチ断面図 (S=1/40).

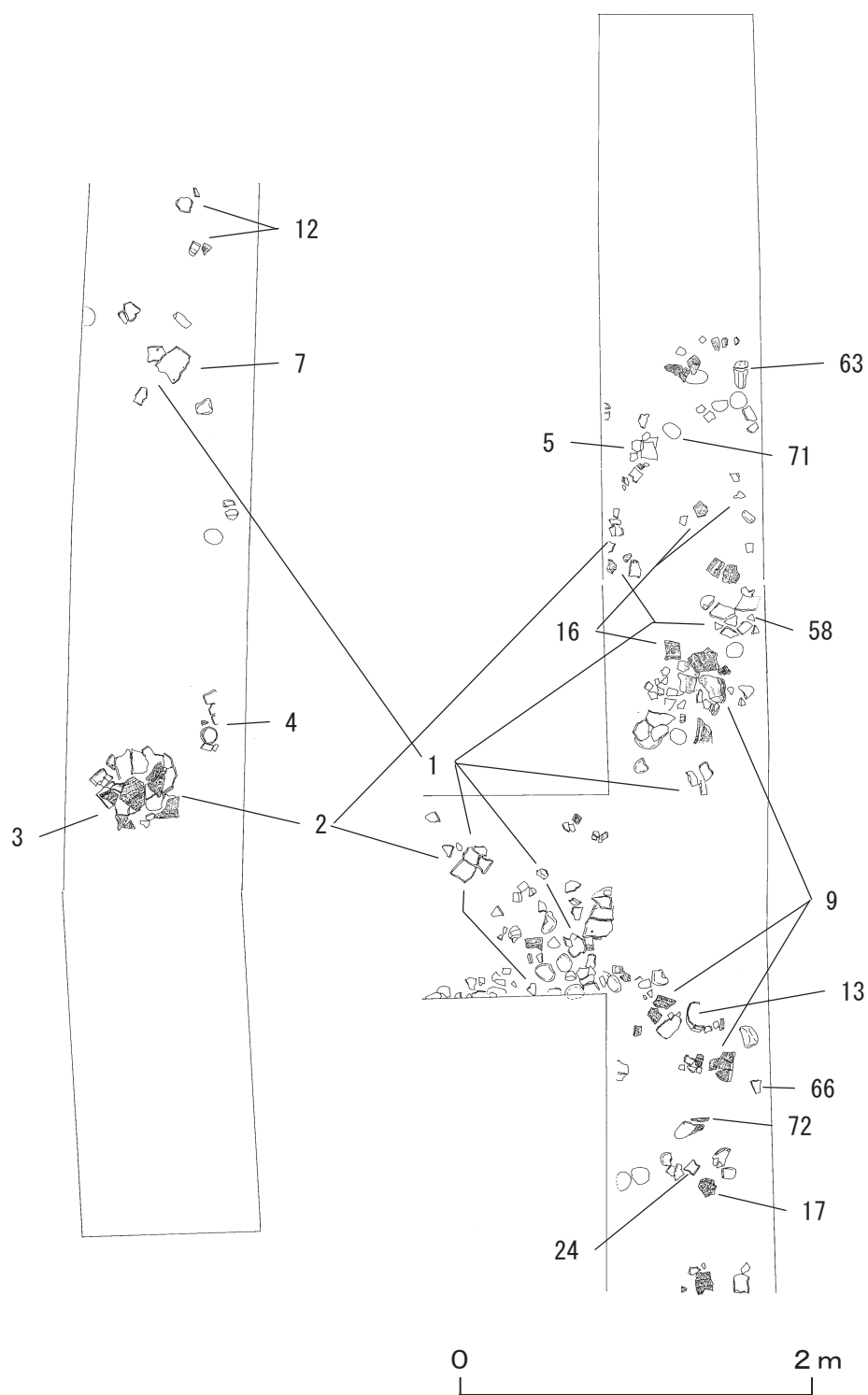


図4. 1・3トレンチ遺物出土状況図 (S=1/40).

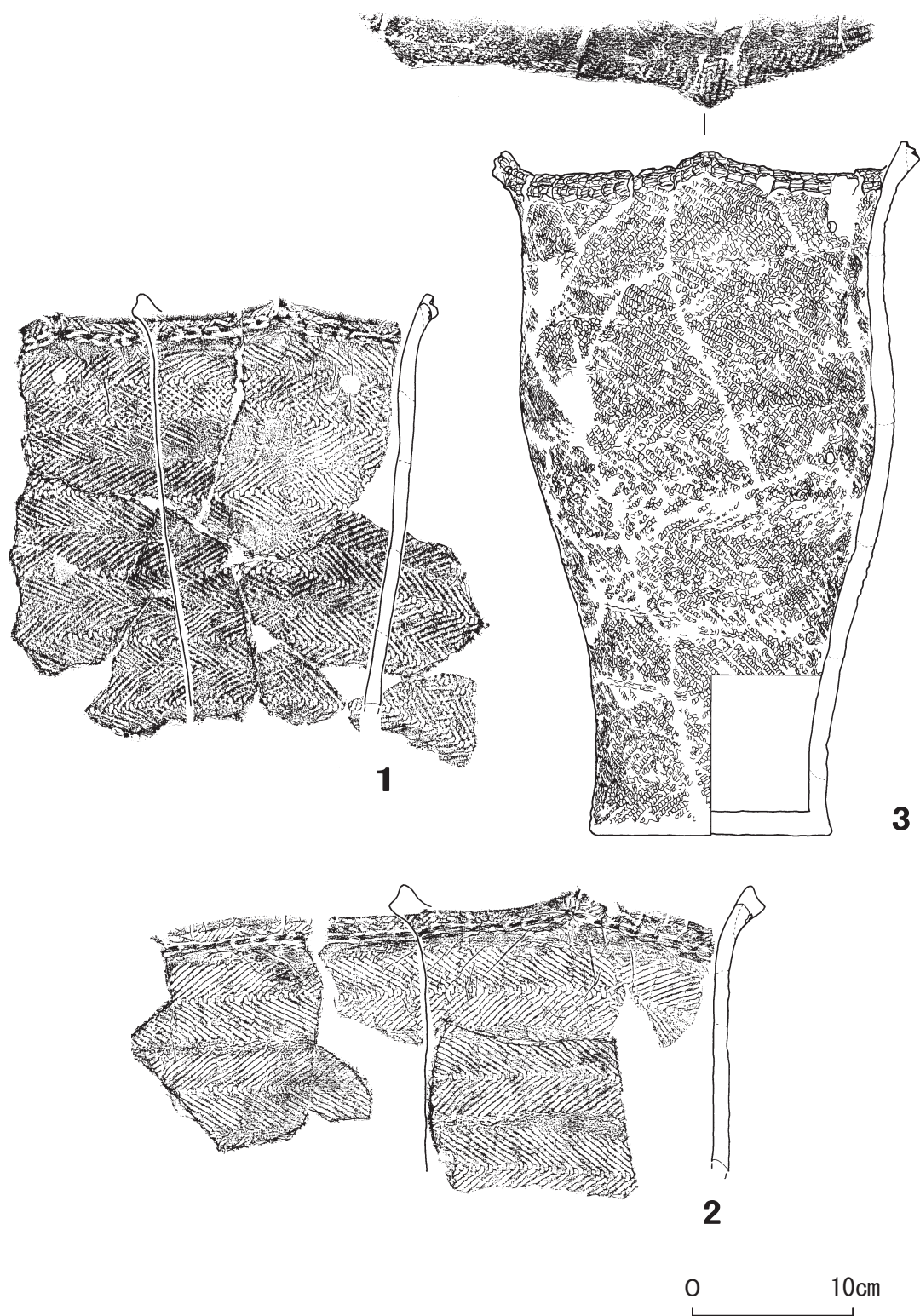
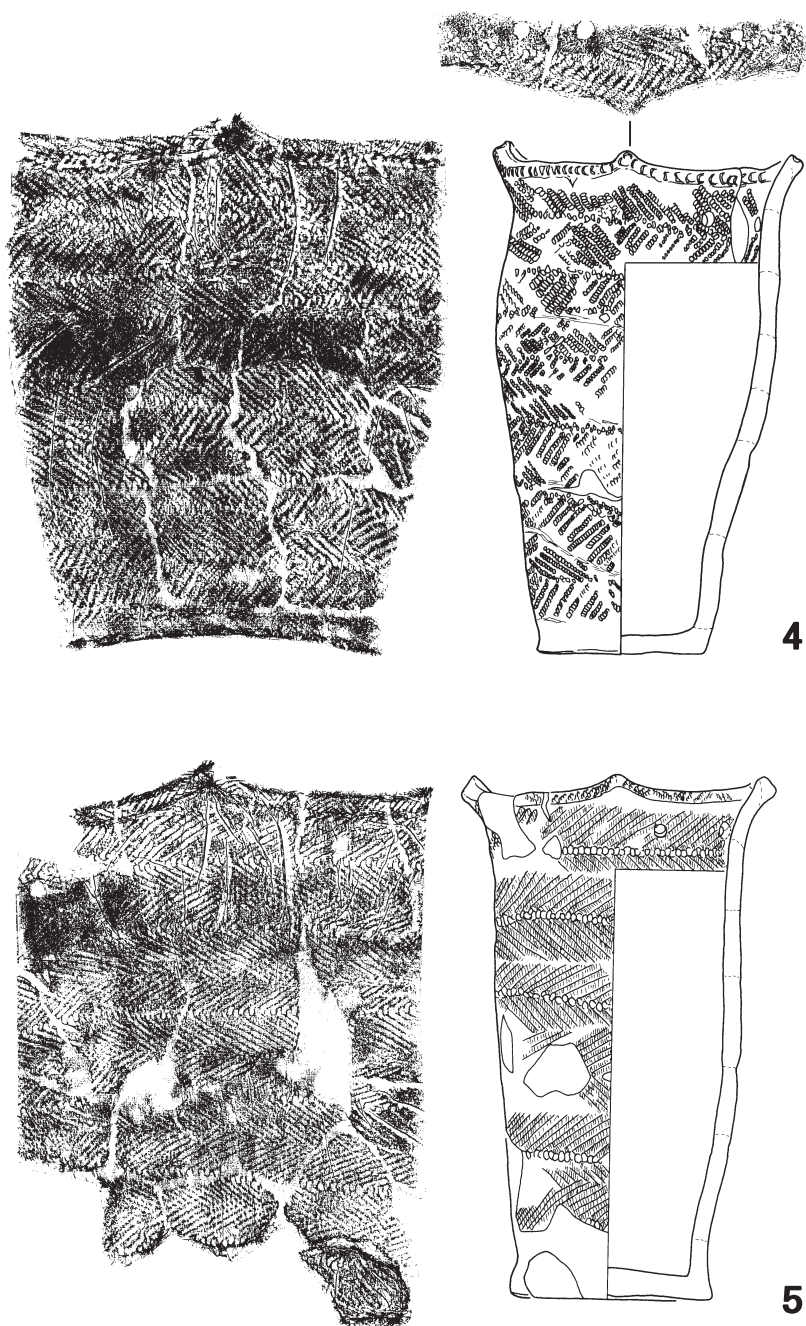


図5. 遺物実測図 (S=1/4).



0 10cm

图6. 遺物実測図 (S=1/4).

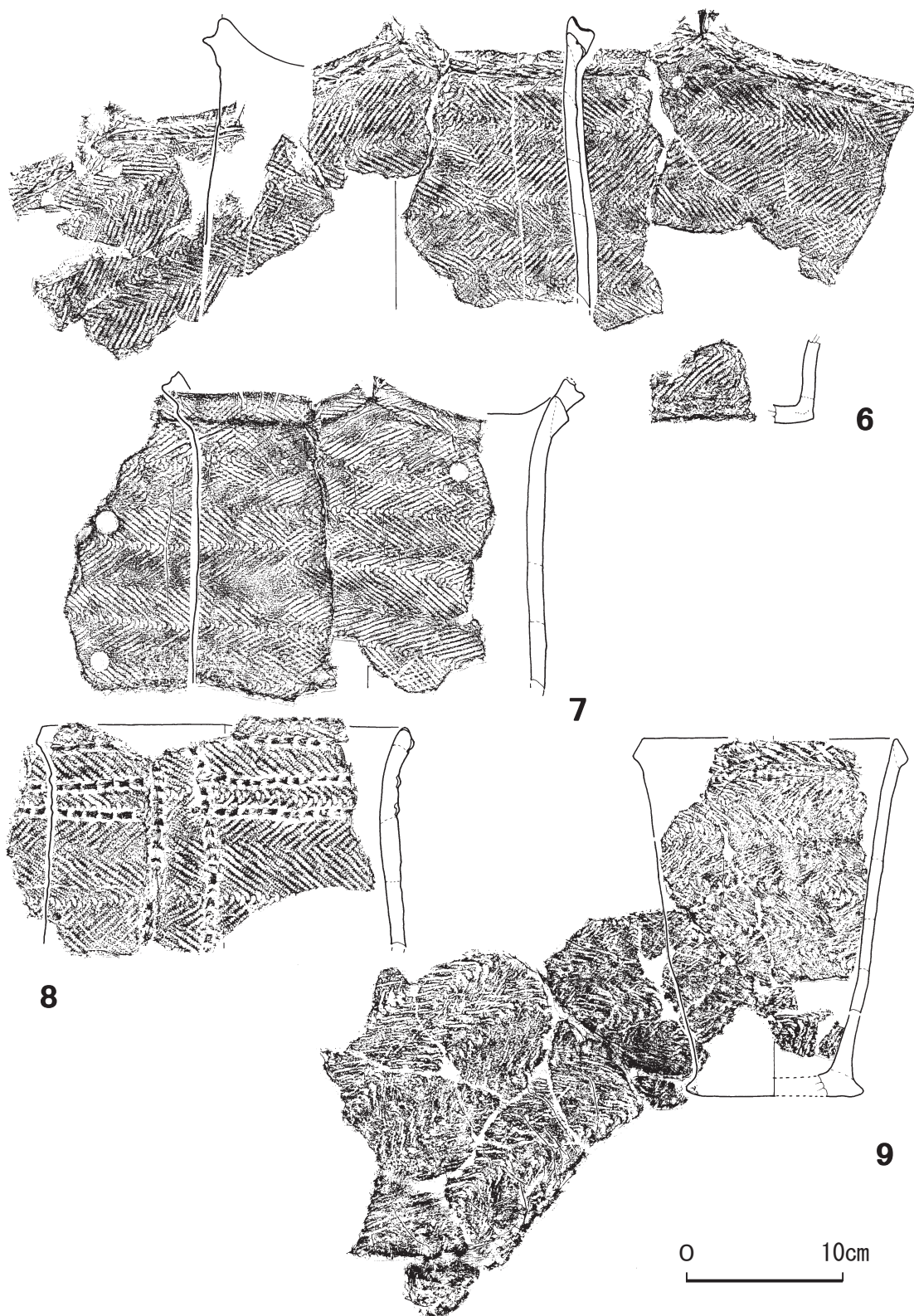


図7. 遺物実測図 (S=1/4).

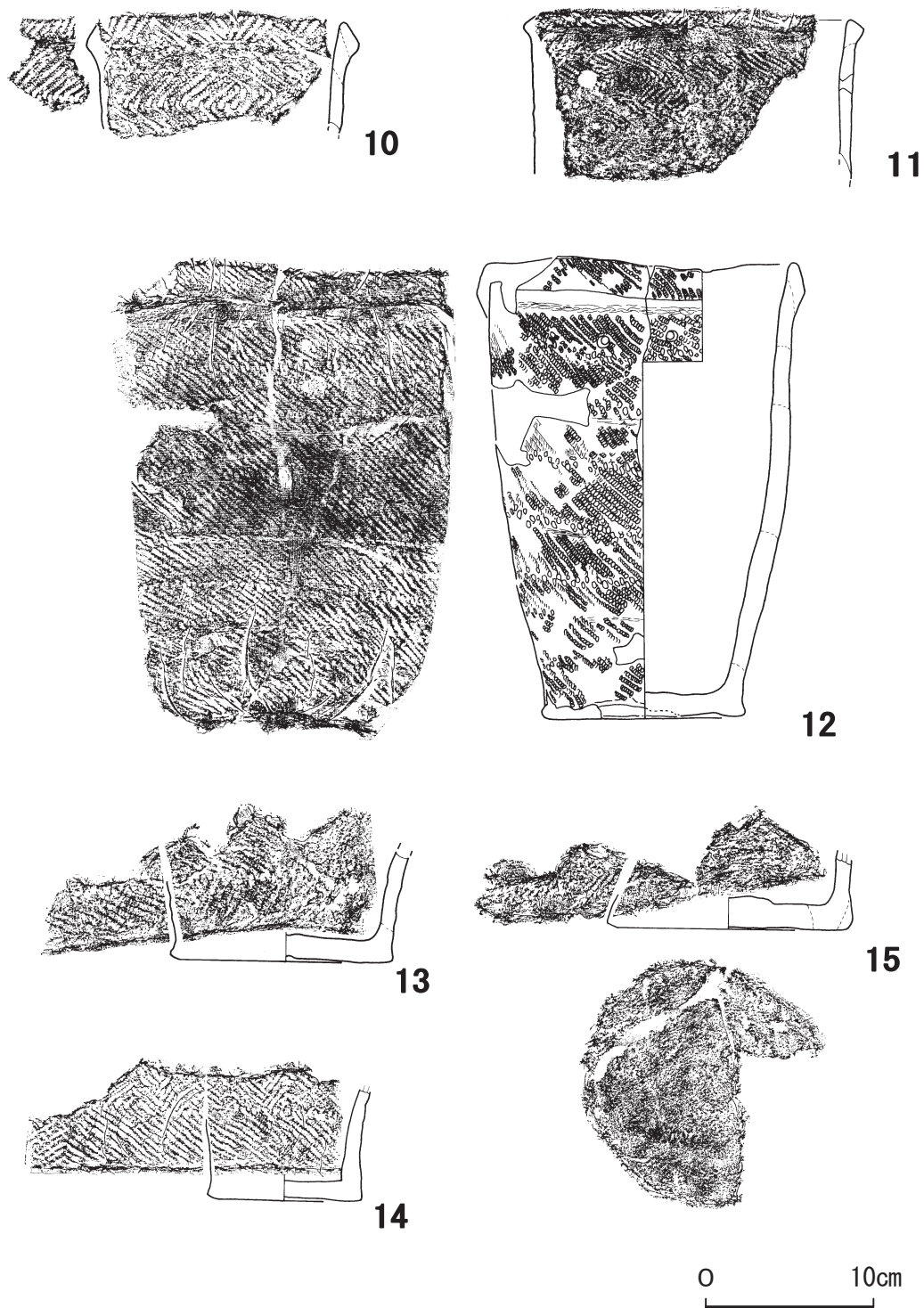


图8. 遺物実測図 (S=1/4).



図9. 遺物実測図 (S=1/4).

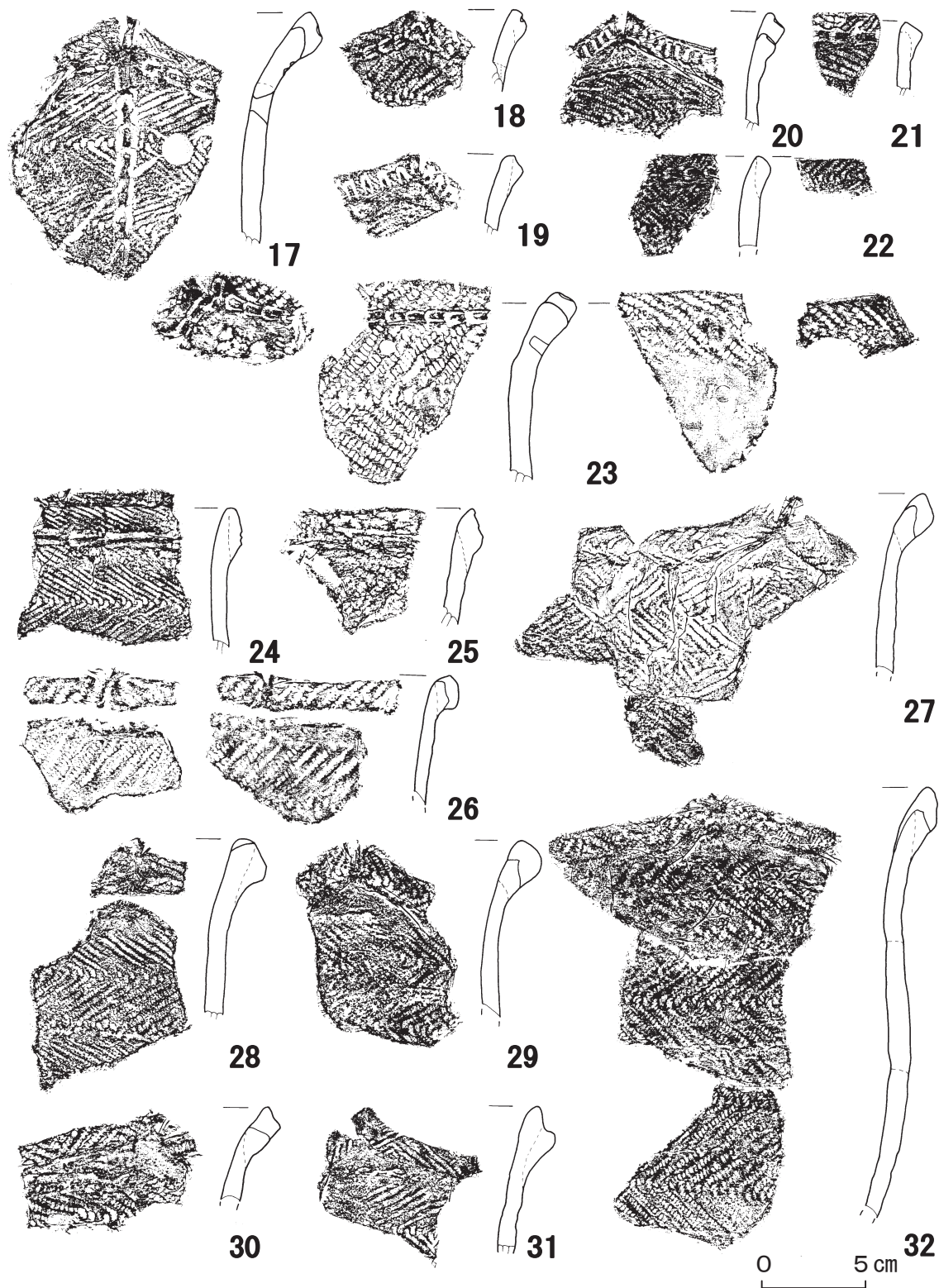


图 10. 遺物実測図 (S=1/3).

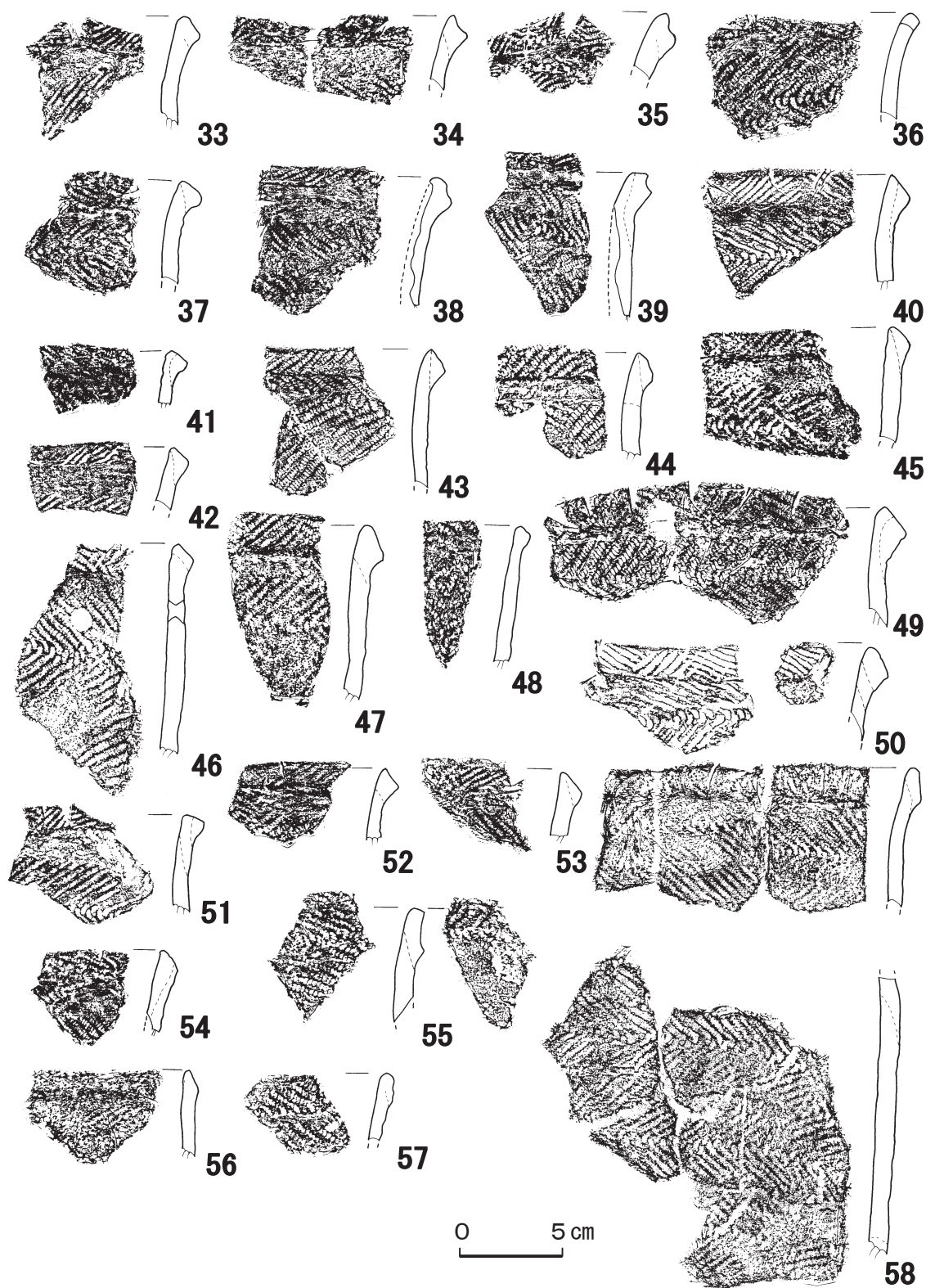


図 11. 遺物実測図 (S=1/3).

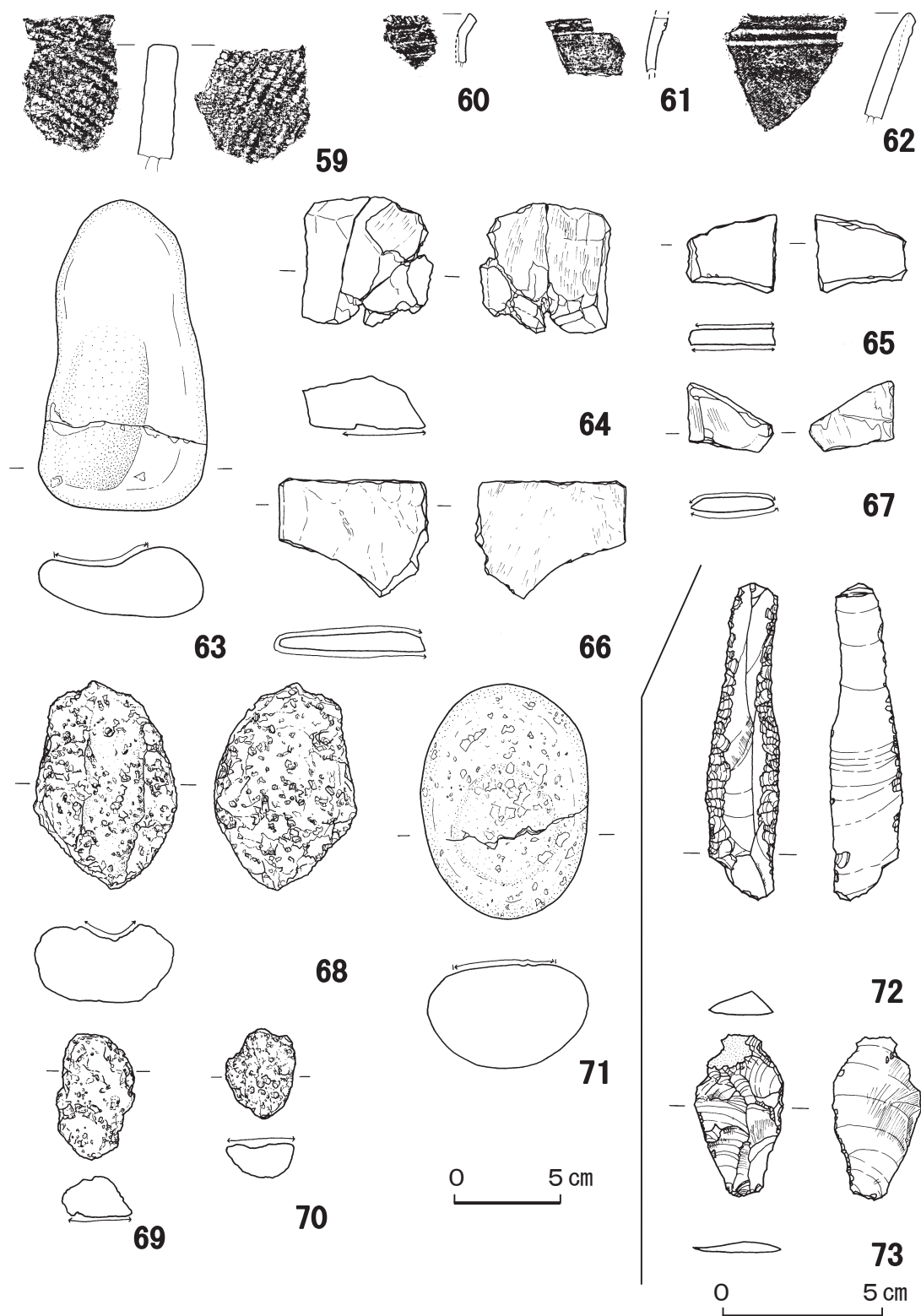


図 12. 遺物実測図 (S=1/3 · 1/2).



図13. 遺跡調査状況。1: 遺跡全体, 2: 砥石・磨石出土状況, 3: 1トレンチ出土状況, 4: 土層堆積状況, 5: 土器出土状況, 6: 1トレンチ完掘状況。



図 14. 出土遺物。付した番号は、実測図に一致する。

12は、器高27cmを測るやや寸胴形の器形。16は、器高32.8cmを測る。17～58は、口縁部資料で、17～25には、押引文が伴う。23には、円形刺突文も認められる。59は、内外面ともRL縄文が施文された厚手の資料。60は、縄線文が施文されていることから鈴谷式と考えられる。61,62はオホーツク式で、沈線文が施されている。

補修孔は、1, 3, 4, 5～7, 11, 12, 17, 20, 46で認められる。

6, 14, 19, 23, 37, 50, 60～62は、鴛泊小学校に保管されていた資料。8, 59は、過去の採集資料。

石器は、11点図示した。63は、片面の一部がくぼみ、砥石として使用されたと考えられる。64～67は、砂岩質の砥石。68～70は、軽石。68は、中央部を長軸方向に削り出したもので、管状になる可能性もある。69, 70は、片面が平らに削り出されている。71は、磨石で片面にのみ使用痕を残す。72は、頁岩製で縦長の剥片の両側縁を調整した石器である。73は、黒曜石製の剥片で、側縁に調整が認められる。

まとめ

今回の調査地点において、廃棄場跡が検出されたことから、さらに標高の高い南側に住居などの居住域がある可能性が高い。

利尻島における同時期のおもな遺跡としては、栄町遺跡(標高25m)や野塚第2遺跡(標高10m)、種富原野遺跡が知られている。また、大磯や本泊の各遺跡でも遺物が採集されているが、いずれも分布調査などによる確認のみで、それぞれの詳細は不明である。

近隣で、発掘調査により遺跡の性格や規模が確認できている遺跡は、礼文島の上泊3遺跡(標高10～30m)のみである。上泊3遺跡では、住居跡5軒と土壇や集礫、炉跡などの遺構のほか、廃棄場跡

が検出されている。廃棄場跡からは、土器がひとまとまりの個体で出土している場合が多く、港町1遺跡の出土状況と軌を一にする。こうした事実は、北海道日本海沿岸に発達した円筒土器文化の影響力を考えるうえで重要であろう。

最後に、港町1遺跡一帯は先述したとおり、宅地造成されず畑地が連綿と広がっていたことからみて、遺構や遺物の埋蔵量は計り知れない。今後、利尻島における縄文時代中期の様相を探るためにも継続的な確認調査を進めることに努めたい。

謝辞

調査から整理作業に至るまで、教育委員会職員をはじめ、重岡徳太郎(故人)、今美香、前田知美、山本千代恵、山本之義の各氏のご協力を得た。記して感謝申し上げる。

引用・参考文献

- 西谷榮治, 1998. 第二編 利尻島の先史文化. 利尻富士町史: 311-333. 利尻富士町.
- 西谷榮治, 2000. 第一章 先史時代. 利尻町史通史編: 131-152. 利尻町.
- 岡田淳子・宮塚義人・梶田光明・西谷榮治・荒牧美枝子・塩野崎直子, 1983. 利尻島の埋蔵文化財(1). 利尻町立博物館年報, 2: 11-26.
- 岡田淳子・宮塚義人・梶田光明・西谷榮治・梶田美枝子・塩野崎直子, 1984. 利尻島の埋蔵文化財(2). 利尻町立博物館年報, 3: 9-50.
- 利尻富士町教育委員会, 1995. 利尻富士町役場遺跡発掘調査報告書. 120pp.
- 利尻富士町教育委員会, 2011. 利尻富士町役場遺跡発掘調査報告書Ⅱ. 358pp.
- 財団法人北海道埋蔵文化財センター, 1985. 礼文島幌泊段丘の遺跡群 東上泊・上泊3・上泊4遺跡. (財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書, 19. 418pp.